

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：12101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580021

研究課題名(和文) 第一次世界大戦とフランス美術史学の「文化工作」

研究課題名(英文) World War I and Kunst Politiki of of French Art Historiography

研究代表者

藤原 貞朗 (Fujihara, Sadao)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：50324728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は第一次大戦時のフランスの美術史家の言動を調査し、国内の愛国的言説と対外的文化工作がいかに戦後のフランスでの美術史編纂に影響を及ぼしたかを明示することを目的とした。当地では戦前まで、教会美術、王統派美術、共和派美術が、政治的党派を超え一貫した美術史認識を得ることができずにいたが、この対外戦争はフランス美術史家にとって国内の文化遺産を統括的に自国のものと認識し、保護する追い風となる。戦時の文化工作は非常時の一時的とみなされるが、戦後の美術史編纂理念(普遍主義、国際主義、人文主義)には戦時の言説が影を落としている。大戦間の美術史理念は国際的スタンダードとなるが起源は戦前の戦闘的言説にある。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the discourse and cultural activities of the French art historian during the First World War including their patriotic discourse for the French people and their aggressive claims to the German. It aimed at reviewing how these discourses influenced the compilation of art historiography after the war. In France it had often occurred here after the Revolution many kind of vandalism to the church art and the royal art: they could not establish a consistent history of French art from the point of view of the republican parties. The war that occurred in such a crisis situation became a tail wind to French art historians to recognize and protect the domestic cultural heritage as a whole in France. Wartime political discourses are considered "special" in an emergency, but in the conception of art historiography in the postwar period (universalism, internationalism, humanism), the wartime discourses are deeply shadowing.

研究分野：美学美術史

キーワード：フランス美術史 美術史編纂 第一次世界大戦 アンリ・フォション 大戦間

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦期のフランス美術の研究は、フィリップ・ダジャン著『画家の沈黙 Silence de peintre』に代表されるように1990年代から活発化する。2000年以降は、戦争と美術の関係を問う画期的な展覧会が相次いで行われている（ロワーズ美術館での『第一次大戦下の芸術 L'art au coeur de la Grande Guerre』展など）。2014年は大戦開戦百周年にあたり、展覧会やシンポジウムが予定されており、戦時の美術家（とくに画家）の活動がいつそう明らかになることが期待できる。しかし、美術史家の戦時の言動については、これまで本格的な学術研究の対象となっておらず、その功罪が十分に検証されていない。応募者は1997～2000年のフランス留学時に大戦期から大戦間期にかけての美術史家の仕事、特にアンリ・フォションについて研究し、この戦争が彼の思想に極めて大きな影響を及ぼしたことを明らかにした（DEA論文『フォションと日本、リヨン時代のフォションの再検討』）。さらに、2005～2011年には、大戦間期のフランスの美術史学を再検討する日仏美術学会ワークショップを3回開催し、この研究に取り組んできた。しかし、2001～2012年の10年間の主要な研究エフォートは、アンコール遺跡の考古学史（2002～03年科学研究費若手研究Bを受領、研究成果として『オリエンタリストの憂鬱』、めこん、2008年を刊行）と山下清の研究（平成25年度科学研究費補助金研究成果公開促進費学術図書を受領、共著『山下清と昭和の美術』、名古屋大学出版会、2013年刊行予定）に費やした。2014年度は、第一次世界大戦開戦百周年を記念する年であり、新たな資料の公開も期待できるため、この機

を捉え、戦時のフランス美術史学の学史研究に本腰を据えて取り組み、成果を出したいと考えた次第であった。

研究期間内での調査の目標は、まず、第一次大戦下の5年間のフランスの美術史家の活動に関する資料をフランスにおいて網羅的に収集することに置いた。そして、収集した資料を分析し、戦時の美術家の言動と対ドイツの文化工作との関連性を解明することに主眼を据えた。加えて、それが大戦後（大戦間期）の美術史編纂にいかに関与したのかを分析することを課題とした。

調査・分析は具体的に（A）大戦時の美術史学史の年表の作成、（B）重要資料の資料集の作成と解題、（C）重要な論争とトピックの精選と分析、を行い、随時、調査結果を公表することとした。

本研究の学術的な特色と予想される結果と意義に関しては、以下の通りである。

フランスの美術史学の特質とされる普遍主義と平和的人文主義の理念は、第一次大戦後の1920～30年代初頭に形成されたと考えられ、戦時の文化工作とは切り離して考えるのが一般的である。しかし、本研究はこの通説に疑義を呈し、戦時の思想との関係を明らかにしようとするものだった。戦時と戦後を切り離すのではなく、むしろ、戦後の美術史編纂の出発点を戦時に置くことによって、新たな問題提起を行うことができる考えたのであった。

2. 研究の目的

本研究は、第一次世界大戦期のフランスの美術史家の言動を検証し、戦時の「文化工作」というべき美術史編纂理念の見直

しを図ることを目的とした。この戦争は文化遺産に多大な被害を与え、美術史家に自国の文化遺産への愛国的感情を深く刻み込むことになった。エミール・マールやアンリ・フォションというフランスを代表する美術史家の戦時の仕事にもそれは顕著である。戦時の行動や歴史認識は、非常時の一時的なもののみなされることが多いが、戦後のフランスの美術史編纂の理念（普遍主義、国際主義、平和的人文主義など）にも深く影を落としている。こうした視点から、戦時の美術史家の言動を検証し、大戦間の平和主義的な美術史理念が戦時の戦闘的な言動に根をもつことを明らかにすることを目的にした。

戦時の美術史家の愛国的な言動と戦後の平和主義的で普遍主義的なフランスの美術史編纂は切り離して考えられてきたが、本研究では、戦時にこそ、戦後の美術史編纂の出発点を見るべきであるという斬新な仮説を立てることによって、通説にチャレンジした。さらに大胆に言えば、戦争の経験と「勝利」によってこそ、戦後のフランス美術史およびフランス流の美術史学を形成、発展させ、「成功」することができたのではないかと問題提起をする、極めて挑戦的な研究を目指した。

もちろん、戦時の美術史家の言動を非難するために本研究を行うわけではない。大戦から百周年を迎え、戦時の知識人の言動の功罪をようやく客観的かつ実証的に検証できることになった現在、それを明らかにすることは、戦後に受け渡され、今日に直結するフランスの美術史学の理念と実践を再考するうえで、さらには、その影響を受けたであろう北米と日本の美術史学の再検討を行ううでも欠かすことのできない作業であろう。

実際、大戦後のフランスの美術史学の成功の背景には、ドイツから解放された東欧諸国の美術史家や大戦時に協調関係を取り結んだ北米や日本の美術史家の支援もあった。この時期の美術史編纂は、大戦の「敗戦国」となるドイツの研究者抜きの体制のもとに、国際的に展開されたといえる。この視点も従来の研究では見落とされており、戦後の独仏美術史の乖離を問い直す意味でも、本研究は新しい視座と問題提起を行うことができるだろう。

戦時の学者や知識人の活動とその功罪の検証は、日本やドイツなど、第二次世界大戦の敗戦国においては、学術的な研究の対象となっている（例えば、Ringer, *The Decline of the German Mandarins* や春成秀爾『考古学者はどう生きたか』など）。しかし、いわゆる「戦勝国」においては手がかけていない。戦時の活動を肯定的に捉えているわけではないが、戦時においては不可避的な行為であったとみなす傾向が強いからである。その結果、戦争をめぐる知識人の言動の研究においては、戦勝国と敗戦国の間には大きな認識の相違があり、解釈の齟齬も頻繁に生じている。本研究によって過去の歴史的理解の齟齬を解消し、より相対的かつ総合的に、戦争と美術史学、さらには戦争と知の関係について考えることができるようになると考えられる。日本の研究者が行っている日本の戦時下の美術や歴史編纂の研究に対しても、新しい視座を提供できると考えている。

また、茨城大学に勤務する私は、2011年の大震災で被災し、甚大な人的・物質的被害を受け、大きな喪失感を体験した。文化財が失われる現場も目撃した。戦争は人災であり、震災とは区別すべきではあるが、とてつもなく大きな惨禍に直面し、モニュメントや美術作品を失った人間の喪失感をいくらか共感することができたように感じている。そして、有事における美術と思想

について主体的に考える必要性を強く感じるようになった。本研究は、その意味で、学問的かつ客観的な歴史研究というだけでなく、ある種の普遍的な人類学的研究として自ら主体的に取り組み、惨禍と学問の関係の研究の重要性を訴えることができると考える。

近年、第一次大戦期を含む欧米の美術史学の学史研究の重要性を理解し、研究を開始する若い学者も登場し、一定の成果も世に問われはじめている。しかし、この分野の重要性は、日本でも美術史学会や美学会などの学界に広く認知されているとはいえない。本研究を成功させることによって、学史研究の重要性と有効性を、学界、そして、広く世に認知させたい。

3. 研究の方法

本研究の調査対象は主として2つに大きく分けられる。美術史家の著作物や個人資料を対象とした文献学的調査と、活動の足跡を辿ることを目的としたフィールド調査・研究である。各年、調査対象とする美術史家のある程度に限定して集中的に資料収集と調査を行った。平成26年度は「パリ大学・国立美術館周辺の美術史家の調査・研究」、27年度以降は「地方での美術史家の活動の調査・研究とフィールド調査」を計画し、遂行した。

調査は国内での資料収集調査と海外調査を行った。年1回(4週間)の計画で海外(主にパリ)での文献学的調査とフィールド調査を行ったが、限られた時間を補うため、あらかじめ出来る限り国内で収集可能な文献は国内で調査を済ませておいた。

まず、パリ大学周辺の1931年のパリ大

学美術史・考古学研究所の設立に関わった美術史家の戦時の活動を調査し、資料収集と資料分析を行った。とりわけ、アンリ・フォション、エミール・マール、ルイ・ディミエ、ルイ・レオなどについては、かなり多くの資料を収集することができ、まずはその資料の分析と補足資料の収集から始め、その他の大学関係の美術史家の活動の検証を行った。

調査地はパリの各種学術施設で、フランス国立図書館やパリ大学美術史図書館のほか、とくに国立美術館付属図書館、ルーヴル学院図書館など、美術史の資料の充実した場所で行った。

上記調査の後、複数の大学で行われた第一次大戦のための「文化工作」マニフェスト連続講演会(Questions de Guerre)の活動についての詳細な調査と資料収集、リヨンなどの地方の美術館や公共施設などで行われたいわゆる「戦争美術展」とそれにかかわった美術史家についての調査と資料収集を行った。ついで、収集資料の整理と分析へと移り、収集した資料を分析し、戦時の美術史家の言動とその成果物の功罪を明らかにした。

資料整理と分析に当たっては、フランスの美術史家とその協力者の活動、および、それと対決したドイツの美術史家の活動をリンクさせる年表の作成を作成し、大戦時に美術史家や美術関係者によって発表された著作物、とりかわされた文書、個人的な手紙を中心に分析を行った。また、重要な論争とトピックを精選し、文化工作の重要事項となった問題を取りまとめることができた。

4. 研究成果

本研究は、第一次世界大戦時(1914-18)

の主としてフランスの美術史家の言葉と行動を調査し、戦時の国内向けの愛国的言説、および対外的な「文化工作」というべき攻撃的言説が、いかに戦後のフランスでの美術史編纂に影響を及ぼしたのか、その理念と現実の見直しを図ることを目的とした。

この戦争はフランス国内の文化遺産に多大な被害を与えたが、当地では、戦前の政教分離政策のなかで、以前よりキリスト教の教会や文化財は危機的な状況にあった。また、フランスではそれ以前より、大革命の経験のもとで、教会美術、王統派美術、共和派の美術などが、政治的党派を超えて一貫したフランスの美術という認識を得ることができず、文化遺産の保護およびフランス美術の歴史編纂は行える状態になかった。そうした危機的状況の中で起こった対外戦争は、フランスの美術史家にとっては、国内の文化遺産を統括的にフランスのものとして認識し、保護する追い風となったといえるだろう。共和派の美術史編纂を担ったアンリ・フォションやポール・ジャモラ戦後に活躍する美術史家の言説には、戦前には見られないルイ・ディミエのような王統派的言説やルイ・レオのような愛国的言説がみられるようになるのはそのためであった。

戦時の活動や文化工作的言説および歴史認識は、非常時の一時的なものともみなされることも多いが、戦後のフランスの美術史編纂の理念（普遍主義、国際主義、平和的人文主義など）を詳細に検証するならば、戦時の言説が深く影を落としていることが分かる。フランスを中心にした大戦間の平和主義的な美術史理念はその後、国際的なスタンダードとなっているが、その起源は戦時の戦闘的な言説にあることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

藤原貞朗、「1931年のパリ植民地博覧会の芸術と古典主義 植民地主義と古典主義の奇妙な同居」、天野知香編『西洋近代の都市と芸術3 パリII 近代の相克』、竹林舎、2015年11月、285 - 303ページ。査読無し。

Sadao Fujihara, «Les échanges entre le Japon et l'Indochine française durant la Seconde Guerre mondiale; aux origines de la collection d'art khmer du Musée national de Tokyo», Ebisu (Etudes japonaises), 51, Maison franco-japonaise, 2015, p.155-174.査読無し。

藤原貞朗、「フランス的知性と美術史学」、『日仏文化』84号、日仏会館、2015年3月、78 - 80ページ。査読無し。

藤原貞朗、「大戦間期の日仏会館の東洋学者とフランス極東学院」、『日仏文化』83号、公益財団法人日仏会館、2014年1月、121 - 127ページ。査読無し。

〔学会発表〕(計1件)

比較文学会東京大会シンポジウム招待発表「美術史編纂をめぐる国際的・学際的競合と齟齬」、東京工業大学、2015年10月17日。

〔図書〕(訳書)(計2件)

藤原貞朗訳、タルディ著『塹壕の戦争 1914-1918』、共和国、2016年11月、全185ページ。

藤原貞朗訳、タルディ、ヴェルネ著『汚れた戦争 1914-1918』、共和国、2016年12

月、全 173 ページ。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

藤原 貞朗 (FUJIHARA SADAO)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：50324728

(2) 研究分担者、連携研究者、研究協力者

無し